

〈所在地〉東京都東村山市青葉町4・1・13 〔交通〕西武池袋線清瀬駅より久米川駅行バス、または西武新宿線久米川駅より清瀬駅行バスにて多摩研前下車 〔開館日時〕月・金曜日及び祝祭日を除く毎日、午後一時より四時まで 〔入場料〕無料

### 例会抄録

中世ヨーロッパの衛生思想 six non naturals  
とナイチンゲールの看護思想について

平尾 真智子

一、はじめに

看護の本質とは何かを探究する場合の一つの手がかりとして、ナイチンゲールの看護思想を分析するという手法がある。彼女の著書『看護覚え書』には看護の基本的な原理として、新鮮な空気、水、採光、暖かさ、静かさ、適切な食事について述べられており、その内容は、中世以来 six non naturals という用語で伝えられてきた思想と非常によく似ている。この six non naturals とは、六つの衛生条件というほどの意味で、その内容は空気、運動、睡眠、飲食、排泄、情動となっている。これらは毎日の生活のなかで現実的に人間の健康または病気を決定する因子である。

ナイチンゲールの他にもアメリカの看護実践家ヘンダーソンやロイの看護理論、そして看護の方法としての基礎看護技術の内容の構造を分析してみると six non naturals の考え方に通じるものがある。そのため six non naturals についての研究は、看護の本質の探究につながる重要な意義をもつといえる。

#### 二、six non naturals のルーツ

ヒポクラテスの治療の中心は、食事その他のこまかい配慮に基づく養生法にあつた。もちろん彼は技術的な治療を無視したわけではないが、養生法には注意を怠らなければ、彼が人の本性と呼ぶところの自然治癒力が発動して病気は回復に向かうというのがヒポクラテスの医学の軸をなす考え方であつた。

そのヒポクラテスの医学を学んだガレノスは、健康と病気とその中間の状態を必然的に維持する原因というものを考え、それらを適度にあたえることが健康であり、不適切に与えることが不健康であると考へていた。non naturals はガレノスの著書『医術』、『健康の保持について』、『初心者のための脈拍の本』のなかで取り上げられている。

アラビア中世の医学で広く用いられたヨハンニチウスの『ガレノスの小治療学入門』の内容は、医学は理論と実践とからなり、このうちの理論は、naturals (生理学)、non naturals (衛生学)、contra naturals (病理学) から構成され、実践は non naturals の六つのことからの調整、薬物、外科からなつ

ている。

ヒルデガルト・フォン・ビンゲンは十二世紀に生きた尼僧で、女医、神秘家、博物学者でもある。彼女にはいくつかの著作があるが、そのなかの「ベネディクト会則の解説」で健康についての要件として、生活の規律が語られている。その内容は non naturals に似たような項目となっている。

### 三、治療学からの看護学の分離

医学部のカリキュラムに「治療学総論」に相当する科目はない。診断学はあるが医療の最終目標である「患者の病からの解放と社会復帰」の手段である治療について、その総論を学問として体系化した著書は皆無に近く、学としての治療学とその体系化を望む声も聞かれる。

治療学の基本はヨハンニクススの著書で述べられているように、non naturals の養生法、薬物、外科の三つにある。そのうちの non naturals の養生法の内容は、近代看護学で教えられる看護方法とほぼ同様のものである。現代アメリカの看護理論家ロジャースは看護を「非侵襲的治療様式」に関与するものにとらえている。

以上のことから一つの仮説として、治療学から看護学が分離し、独立した学問になったと考えることができるのではないだろうか。

(平成五年四月例会)

## 中国伝統医学の蔵府を考える

### 一 肝と肝臓 Liver

宮川 浩也

中国伝統医学の蔵府観は謎が多い。たとえば、三焦・心包は有名無形の蔵府といわれ、現代医学のどの臓腑に比定すればよいのか、今もって確たる見解を得られていない。また、中国伝統医学の「脾」は、現代医学の脾臓に該当するとか脾臓と脾臓を併せているなどと考えられている。このように中国伝統医学の蔵府観は、相変わらず未解明の部分が多い。

一般的に言って「文献中に見える五臓の機能と現代医学に於ける諸臓器の機能とを対照すると、肝・心・肺・腎については略ぼ現代の肝臓・心臓・肺臓・腎臓と同じものとみなすことができる」とするものが最も妥当らしい見解である。

ところが、中国伝統医学の經典ともいえる『素問』・『靈樞』などの記載をみると、本当に中国伝統医学の五臓が現代医学でいう臓器とみなしてよいのだろうかと迷ってしまう。

次のいいかたもある。「肺という『臓』は、肺葉をもつ臓器だけではなく手太陰肺経が流れる身体すべての領域を指す概念である。営・衛の気や脈動とのかかりを考えれば、皮膚や心臓や胃腑との関係性なども、肺臓という巨大なシステムのうちに入れなければならない。同様に腎臓といえは、空豆状の臓器ばかりか、脳、脊髄、多くの経絡を含む一大システ